

学校教育ビジョン  
 学校教育目標:自分で考え、自分から動き、自分の未来を創る勅使っ子の育成 ~みんなが笑顔になれる学校を、自分でつくる、みんなでつくる~  
 ・算数科を柱とする授業改善による自律した学びでの育成  
 ・計算クライミングや家庭学習習慣等の取組による基礎・基本の確実な定着  
 ・生徒指導の4つの視点を意識した授業や活動の実施  
 ・ChokuCGsにもとづく目標設定・振り返り・改善の取組  
 ・「勅使っ子タイム」「体力アップ1校1プラン」による体力の向上  
 ・家庭と連携した取組によるよりよい生活習慣の定着

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果 (最終)	今後の課題 (最終)
①教育課程・学習指導	授業づくりの基盤となる基礎基本の定着	・帯タイム、課題解決後の隙間時間に児童が進んで取り組める学習環境整備 ・学力調査問題分析による授業改善 ・家庭学習取り組みの改善	確かな学力 (吉澤)	・昨年度より「計算クライミング」と呼んでいる短い時間で取り組める自分のペースで進めていく計算問題プリントに全校で取り組んでいる。 ・今年度「ドリルプラネット」と呼ばれる学習用端末で自分のペースで取り組めるソフトを全校で購入した。	【成果指標】 ・単元末の算数評価テストにおける知識・技能の正答率	単元末の算数評価テストにおいて知識・技能の正答率が9割以上の児童数 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	学期末(7月・12月)に実施	D 55.8%	・計算クライミングやドリルプラネットにおいては、児童が一生懸命取り組む姿勢は見られたが、定着につながっていない結果であった。繰り返し学習をする習慣化や継続をする環境づくりが課題である。 ・達成度判断基準の妥当性については要検討。
	自ら学び考え、共に深め合う算数科の授業づくり	次の3点を意識して単元構想シートの作成する。 ・指導上の留意点(ねらい達成のため) ・学びの形態(子に委ねる学びのため、協働的な学びのため) ・つけたい力や単元のゴール(見通しをもつため)	確かな学力 (加藤)	子に委ねる学びを実現する中で、教科のねらいを重視できなかったり、協働的な学びが単なる作業の1つとなってしまうことがある。 教師自身が、授業のねらいや単元のゴールを意識し、学びの形態を目的をもって設定できるようにする。 児童は、学び集会等を通して、学びを自分のこととしてとらえ、意識して学ぶことができるようにする。	【成果指標】 算数科の授業において、学期に2単元以上単元構想シートを活用し、授業を実践したか。  【努力指標】 算数科の授業を中心に、自分から学び子に近づけたか。	「単元構想シートを活用した授業実践に努めた」と回答した教職員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満  「自分から学び子に近づいた」と回答した児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	教職員、児童に対してアンケートを実施(7月・12月)	A  A	・授業のねらいや単元のゴールを意識し、学びの形態を目的をもって設定することに重点を置いて、単元構想シートを作成することはできた。今後は、適切に実践できたかどうかの分析をする必要がある。教師が自分の授業をふりかえることで、授業改善が図られ、深い学びの実現を目指す。  ・学び集会、参観授業などの取組により、学びを自分のこととしてとらえ、意識して学ぶことができるようになった。今後の課題としては、児童自身が成長の実感を得られる必要がある。学習の前と後で、学習内容の理解だけでなく、学び方についても自己のふりかえりができるように意図して取り組む。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	4つの視点を生かした授業づくりや行事の取り組み	4つの視点の観点から、学校生活全体(授業や行事など)を通して、子どもが相手を多面的な見方で捉えることができるチェックシートを作成し、活用する。	豊かな人間性 (山田千)	普段から学校生活全体を通して、4つの視点ができるような取り組みをしている学年がある。しかし、授業で4つの視点を意識する場合、具体的な姿がイメージしにくいこともある。	【成果指標】 授業や行事を通して、4つの視点を意識して取り組むことができたか。	「授業や行事を通して、4つの視点を意識した」と回答した教職員が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	教職員アンケートを実施(7月・12月)	B	生徒指導の4つの視点についてのめあてを立て、毎月振り返りを行うことで教職員に声かけをすることができた。今後、より教職員の意識を高めていくために、毎月の振り返りに加え、翌月のめあてを週案に綴り、日頃から意識できるようにしていく。
③キャリア教育・進路指導	よりよい自分や集団をイメージし、目標に向かって努力する態度の育成(CCGs)	・全校児童で意見を出し合い、CCGs9つを作成する。 ・学級や学校の実態から、代表委員会で今月の取組を設定し、全校で取り組む。 ・全校集会で各学級の成果や課題を発表したり、個人の取組カードを廊下に掲示したりすることで、「自分で、みんなで、よりよい学校をつくる」意識をもたせる。	豊かな人間性 (山田千)	全校の意見をもとにCCGsを作成したり、全学年でCCGsの目標を統一したりすることで、児童が同じ目標を共有し、「自分たちで学校をよりよくしていく」という意識を持てるようにする必要がある。	【成果指標】 ・CCGsの取組を通して、よりよい自分や学級・学校を作ることができたか。	「CCGsの取組を通して、よりよい自分や学級・学校を作ることができた」と回答した児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	児童アンケートを実施(7月・12月)	A	全校が見る掲示板に各学年のCCGsのめあてを掲示したり、毎月の集会でCCGsの振り返りを発表したりすることで、児童のCCGsへの意識を高めることができた。今後は、児童がCCGsに取り組むことを通じて、学級や学校の変化を実感できるようにしていく。そのために、教職員が授業や行事の中でどのような声かけを行うとよいのか、また、どのような視点で児童の姿を見取るとよいのかについて、教職員全体で考え、共通理解を図っていく。
④保健管理	よりよい生活習慣の定着	早寝・早起き・朝ご飯を軸とした「元気もりもりプロジェクト」の実施	健やかな心身 (山下/阿部)	朝食を毎日食べている児童の割合が、77.8%と少ない。	【成果指標】 朝食を毎日食べる児童が増加したか。	「朝食を毎日食べている」と回答した児童が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	児童に対してアンケートを実施(元気もりもりプロジェクトカード)	A	元気もりもりプロジェクト第2弾では、取り組み期間中、朝ご飯を毎日食べることができた児童が98%であった。学校保健委員会でも、勅使小学校の強みは「朝ご飯」であることを発表し、1・2年生に対しては、永谷園の教材を使った、朝ご飯についての食育の授業を行った。今後も引き続き「早寝・早起き・朝ごはん」の必要性を保健指導し、児童がよりよい生活習慣を身に付けられるようにしていく。

⑤安全管理	教職員の「危機対応能力」と児童の「危機回避能力」の定着・向上	・不審者対応・火災・地震の3種の避難訓練の実施 ・各避難訓練における教員のねらい、児童のねらい及び指導のポイント「おかしも」「いかのおすし」の共有(事前指導) ・地震については、休み時間内に実施 ・実施後の振り返りの充実	健やかな心身(教頭)	「お:押さない か:駆けない し:喋らない も:戻らない」と「いか:ついていかない の:自動車に乗らない お:大きな声で叫ぶ す:すぐにげる し:大人に知らせる」については、教員の指導の下、できるようになってきた。教員の管理下外においても、「おかしも」を意識し、自分の命を守る避難ができるようにしたい。	【成果指標】(教職員)突発的に避難を要する状況においても、適切に判断し、児童を避難させることができたか。	「危機対応能力」が高まったという教職員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート(7月・12月)	A	不審者侵入、浸水、地震、火災の4種の避難訓練を計画的に実施できた。地震の避難訓練では、休み時間に訓練を実施した。児童が管理下でない状況であったが、教職員は、建物内と児童の状況を瞬時に把握し、適切に各自の任務を果たすことができた。
					【成果指標】(児童)身の回りにおける危険な状況を理解し、自分の安全や命を守るための判断と行動ができたか。	自分の身の回りの危険を理解し、安全や命を守るための判断と行動ができたという児童が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	児童アンケート(7月・12月)	A	地震の避難訓練では、自分の置かれた状況に応じて、適切に判断し行動できていた。(例:落下物から身を守るための体勢をとっていた。上級生が下級生に頭を守るように、また窓ガラスから離れたところに移動するよう指示を出していた。)
⑥特別支援教育	児童理解と特性に応じた支援	・児童理解の会を月1回実施 ・専門相談員、特別支援教育アドバイザーを必要に応じて派遣要請 ・児童の実態に応じて個別の指導、少人数指導の実施 ・支援員の適切な配置	豊かな人間性(大木)	気になる児童がいたときに共有する体制が整っている。共有後も継続的に児童に応じた支援が必要である。	【成果指標】児童理解の会を通して児童の実態を共有し、その後適切な支援ができたか。	「児童理解の会を通して児童の実態を共有し、その後適切な支援をすることができた。」と回答した教職員が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員に対してアンケートを実施(7月・12月)	A	児童理解の会を通して、児童の実態を全職員で見えていくとともに、情報共有もきめ細やかに行っていく。全児童対象のSC面談や、必要に応じて専門相談を活用する。
⑦組織運営・業務改善	ICTを活用した業務改善	・Google カレンダーによる予定の一元管理 ・sabaからGoogleドライブへ完全移行 ・Googleを活用した文書作成・情報共有 ・先進事例の視察・共有	組織的な学校運営(山田光)	終礼や職員会議の議事録でドキュメントを活用。クラウド活用の良さを少しずつ実感している段階である。	【成果指標】ICTの活用により質的・量的な業務改善ができたか。	【成果指標】ICTの活用により質的・量的な業務改善を図れた教職員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	教職員に対してアンケート・ヒアリングを実施	A	Googleの操作などで困った際は個別で対応するなど継続した結果、ほとんどの先生方がスムーズに使えるようになってきた。今後も引き続き整備していく。
⑧研修	キャリアステージに合わせた研修への主体的な参画	・日常的OJTの取り組み ・希望調査を基にした研修内容の計画と研修会の運営	教職員の指導力向上(加藤)	教員は、研修を通して、確実に資質・能力を高めている。今後は、さらに各自のキャリアを意識した研修の実施や現状に即した実践的研修も充実させたい。	【成果指標】キャリアステージに合わせ、主体的に研修に取り組みめたか。	キャリアステージに合わせ、主体的に研修に取り組みめたという教職員(対象5人)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート(7月・12月)	A	夏季休業中には、希望調査を基に研修を行うことができ、対象職員全員が肯定的な回答をした。学びたいという希望があったが、一部のテーマしか取り上げられなかったため、今後は学習指導・生徒指導・特別支援教育・ICTの利活用など、バランスよく研修を行えるようにする。
⑨保護者、地域との連携	家庭や地域との「目指す児童像」の共有、家庭・地域の力を活用した教育活動の充実	・各教科や各領域での学習のねらい達成のための外部人材検討、招へい(家庭、勅使地区、市、JA等)	家庭・地域との連携・協働(吉澤)	R6は、各学年とも1回以上、家庭や地域の力を活用した教育活動に取り組んだが、今年度はさらに充実・発展させたい。	【成果指標】家庭や地域の力を活用した教育活動を2回以上取り組む。	家庭や地域の力を活用した、教育活動を2回以上実施した教員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート(7月・12月)	A	2学期も1学期と同様、各学年の実態に応じ担任が地域へ出向いたり、招待したりする学習活動を実施できた。具体的に、3、4年生は養護老人ホームちよくしへ出向き交流をすることで福祉について学びを深め、5年生では漁師をしている保護者の方に来ていただき、漁業について学びを深めていた。
⑩教育環境整備	適切な管理、補充、修繕等による教育活動への支援(文書・施設・備品)	・文書の割り振り与管理 ・安全点検の実施と改善箇所への対応 ・備品の適切な保管・整理・補充	教育環境の整備(東/山下)	適切な文書・施設・備品等の管理や補修等により、教育活動を支援してきた。今後も適切な管理、適時の補充や修繕により教育活動を支援したい。	【成果指標】文書・施設・備品等の管理や補修等により、スムーズな教育活動ができたか	文書・施設・備品等の管理や補修等により、スムーズな教育活動ができたという教職員(10人)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート(7月・12月)	A	2学期も全職員が肯定的な回答をした。新たに購入・作製したものや、不具合の生じたものもあるので、引き続き適切な管理、適時の補充や修繕を行い、教育活動を支援する。
学校関係者評価	<p>・基礎基本の定着について、「今後の課題」をもとに、質や量、取組方法を検討し、改善を図ってほしい。</p> <p>・運動会等の行事では、「児童の友達との関わり方」において、大変よい姿が見られ、うれしく思う。(声掛け・仲の良さ・低学年から高学年への感謝する気持ち)学習指導や生徒指導やるべき取組が多いが、児童の負担にならないように、それぞれの取組をうまく関連させて、児童の力をさらに高めてほしい。</p> <p>・毎年、学校評価をもとに様々な取組をPDCAで実施し、学校も児童の力も高まっていると感じる。この先が楽しみである。学校によって、実態は異なると思うが、他校と刺激しあう(意見交換や取組を参考に)ことで、学校の活性化にもつながると思うので、そのような機会を生かしてほしい。</p>								